

特別支援学校の生徒指導マニュアル

～丁寧な実態把握で生徒に寄り添い、保護者の信頼を得る「MAKフローチャート」を活用～

◆ 所属・提案者（◎代表者）

県立特別支援学校さいたま桜高等学園

◎大澤 慶之

ねらい

本校は軽度の知的障害のある生徒が通学し、職業教育に重点を置いた一般就労率100%を目指す高等特別支援学校である。生徒の実態として、軽度の知的障害の他に発達障害を有する生徒が多く在籍する。開校して10年目を迎えるが、生徒指導件数（授業から生徒を抽出して行った特別指導件数）は、年間100件を越え続けている。本校の課題は2つある。まず一つは、増え続ける発達障害のある生徒への対応である。次に、問題行動を繰り返す生徒への対応が挙げられる。この2つの課題に対して、以下のように適切な指導と必要な支援を行う体制を整備し、効果的な教育実践を行うことが大きな課題である。

- (1) 生徒自身に問題行動の原因を理解させ、更生する意識を醸成する。
- (2) 保護者に生徒の問題行動の原因を伝え、必要な協力を具体的に提示する。
- (3) 問題行動を起こした生徒の担当が一人で悩まず、相談を受けた生徒指導主任が対応に苦慮することなく、組織的に生徒指導が展開できる学校を目指す。

※ MAKは、見捨てない・あきらめない・嫌わない、という開校当初から続く生徒指導の心構えの略称

実践内容

(1) 生徒指導体制の確立

毎年度当初の職員会議において「生徒指導体制」（資料1）を提案し、MAKフローチャートを活用する案件が発生した場合に担当が問題を抱え込んでしまうことがないように全職員への周知を図る。

(2) 特別指導対象となった生徒への指導と支援

本校の生徒は、軽度の知的障害の他に発達障害のある生徒が多く在籍している。本校入学前に適切な指導と必要な支援が行われず、誤った自己理解をしている生徒、不適切な他者理解をしている生徒、繰り返しの問題行動による2次障害を発症している生徒等がいる。このような生徒たちに対して、問題行動に対する指導だけを行っても、根本的な解決には至らない。

ア 問題行動及び問題点の整理

事実確認を行った際に、生徒が嘘をついたりごまかそうとしたりするケースがある。必要な情報を収集し正確な事実を把握することが最初に必要な作業となる。

イ 問題行動の原因究明

「MAKフローチャート（資料2）」を用いて、誤った認識で生徒指導が行われたり、生徒本人が不本意な注意を受けたりすることがないようにする。

(ア) 質問紙法（資料3） (イ) 生育歴調査（資料4） (ウ) 家庭環境調査（資料4）

(エ) 心理分析シート（資料5） (オ) 認知行動分析シート（資料6）

(カ) 2次障害の有無確認 (キ) 外部機関からの情報収集 (ク) その他の項目の追求

ウ 指導目標・指導方針の設定

問題点とその原因となる背景を明確にして、指導目標と指導方針を立案する。特別支援学校における生徒指導は、解決できる案件だけではないことを念頭に置きつつ、適切な指導と必要な支援の範囲の見極めた上で設定をする。

エ 手段（指導・支援の仕方、本人・保護者・地域及び外部機関）

設定した指導目標・指導方針の実現に向けて「個別指導・支援シラバス」（資料7）を立案する。

オ 集団意志の形成（指導・支援に関係する構成員の共通理解）

指導・支援に関係する教職員で、個別指導シラバスの内容を共通理解し、関係者間の連携を十分に図る。必要に応じて、外部機関（医療、福祉、警察等）と連携するためのケース会議を設ける。

カ 手段の実施（誰が・いつ・何を・どのように・どうする）

指導・支援に関係する教職員の役割分担を行う。分担により、組織的に生徒指導を行い、担任や生徒指導主任の負担を軽減できる。また、校内の人的財産を有効に活用することで、効果的な指導と支援を展開できる。さらに、外部機関と必要な連携を図ることで、より専門性の高い指導と支援を行うことができる。

キ 結果（アの問題行動及び問題点に当てはめたときに課題が残っているか）

問題行動の改善を図られているか、再発防止策や継続指導などを検討する。

(資料1)



